

病理部（病理診断科）

1. スタッフ（2024年4月1日現在）

部長・科長（教授）	大城 久 （常勤病理専門医）
医 員（講師）	蛭田 昌弘 （常勤病理専門医）
	岡部 直太 （常勤病理専門医）
シニアレジデント	2 名 （専攻医）
臨床検査技師	8 名 （常勤）
	（内、細胞検査士 8 名、認定病理検査技師 5 名）
事務（メディカルクラーク）	2 名 （常勤）
	（主に受付業務担当）

2. 診療部の特徴

病理部・病理診断科では大学の附属病院の一部門として病理診断業務と教育・研究活動を行っている。当センターは埼玉県南部の地域医療の最後の砦として、病理診断の難易度の高い症例が臓器・疾患を問わず非常に多く集まってくるのが特徴である。診療に関しては、剖検、組織診、細胞診等、当センター内でオーダーされるあらゆる病理検査に対応している。分子病理診断については必要に応じて外部委託により実施している。

当部門は基幹施設として日本専門医機構の病理専門研修プログラム認定を受けている。また、日本臨床細胞学会から施設認定と教育研修施設を受けている。

当部門は安全で質の高い病理診断業務を遂行していくため日々努力しており、病理専門医や細胞診専門医を目指す専攻医にとって最適な研修の場を提供している。

3. 診療実績・クリニカルインディケーター

1) 病理件数等

剖検10件、組織診12,334件、細胞診6,228件、術中迅速組織診812件、術中迅速細胞診237件を実施した。また、免疫染色を1,256件、腎生検蛍光抗体法を96件実施した。

2) 精度管理・外部コンサルテーション

外部精度管理を実施し、日本臨床検査精度管理、埼玉県医師会精度管理でA評価を得た。さらに、日本病理精度保証機構のサーベイランスを前期・後期ともに受審し、いずれも適正との評価を得た。また、内部精度管理として組織診における病理専門医によるダブルチェック率は生検検体で99.5%、手術検体で99.4%であった。ま

た、細胞診における細胞検査士によるダブルスクリーニング率は67.2%、医師確認率は48.2%であった。

病理診断に難渋した症例については外部施設へコンサルテーションを行った。コンサルテーションに快く応じて頂いた先生方に厚く感謝申し上げる。

3) クリニカルインディケーター

組織診の平均報告日数8.1日で、そのうち生検材料は6.5日、手術材料は9.5日であった。細胞診の平均報告日数は2.5日であった。剖検率は1.5%であった。

4. カンファレンス等

研修医を対象とした院内CPCの開催協力とCPCレポートの作成指導を15回（15症例）行った。また、部内カンファレンスとして剖検症例のマクロ検討会、ミクロ検討会を全例で実施した。

5. 研究・学会活動等

【論文発表】

- 1) Morino J, Hirai K, Yoshida K, Kako S, Ookawara S, Oshiro H, Sugawara H, and Morishita Y. Successful Treatment of TAFRO (Thrombocytopenia, Anasarca, Fever, Renal Insufficiency, and Organomegaly) Syndrome With Triple Combination Therapy of Corticosteroid, Tocilizumab, and Cyclosporine: A Case Report. *Cures*. 2025; 17: e80274-e80274.
- 2) Yagi M, Kimura N, Nakano M, Okabe N, Shiraishi M, Okamura H, Oshiro H, and Yamaguchi A. A Case of Acute Aortic Occlusion Occurring in Association with COVID-19 Infection and Ulcerative Colitis. *Annals of Vascular Diseases*. *Annals of Vascular Diseases*. 2024; 17: 287-291.
- 3) Kawahara M, Tanaka A, Akahane K, Endo M, Fukuda Y, Okada K, Ogawa K, Takahashi S, Nakamura M, Konishi T, Saito K, Washino S, Miyagawa T, Hiruta M, Oshiro H, Oyama-Manabe N, and Shirai K. Cribriform Pattern Is a Predictive Factor of PSA Recurrence in Patients Receiving Radiotherapy After Prostatectomy. *Cancer Diagn Progn*. 2024 Nov 3; 4 (6): 715-721.
- 4) Matsumoto F, Matsuzawa Adachi M, Yoshida K, Yamashita T, Shiihara J, Fukuchi T, Morikawa H, Hiruta M, Tanno K, Oyama-Manabe N, Oshiro H, and Sugawara H. Metastatic Pleomorphic Carcinoma of the Lung with Extensive Chromosomal

Rearrangements: An Autopsy Case with a Literature Review. Intern Med. 2025 Feb 1; 64 (3): 409-422.

- 5) Nagashima T, Yabe H, Umemoto N, Matsumoto S, and Oshiro H. A Case of Cutaneous Arteritis Complicated by Crohn's Disease. Intern Med. 2025 Mar 15. doi: 10.2169/internalmedicine.5052-24. Online ahead of print.
- 6) Seto N, Fukuchi T, Kawamura S, Uchiyama T, Oshiro H, Sobue Y, Manabe O, and Sugawara H. Intracranial tuberculoma as an immune reconstitution inflammatory syndrome in a man with AIDS, tuberculous meningitis, and diffuse large B-cell lymphoma. IDCases. 2025 May 8; 40:e02252.

【学会発表】

- 1) 河野哲也、今野良、大城久：ワークショップ3 子宮頸部HPV関連性腫瘍と細胞診、第65回日本臨床細胞学会総会、2024年6月8日。大阪。
- 2) 竹村杏奈、安藤史織、小島朋子、河野哲也、中村啓子、細田健太、片岡令、岡部直太、蛭田昌宏、大城久：ワークショップ1 私の経験した間葉系腫瘍、第63回日本臨床細胞学会秋期大会、2024年11月16日。千葉。
- 3) 安藤史織、竹村杏奈、猪山和美、中村啓子、織田聖月、加藤未歩、河野哲也、岡部直太、蛭田昌宏、大城久：脳脊髄液細胞診とFlow cytometryで推定し得た芽球形形質細胞様樹状細胞腫瘍の1例、第63回日本臨床細胞学会秋期大会、2024年11月17日。千葉。
- 4) 織田聖月、細田健太、小島朋子、河野哲也、大城久：スライドカンファレンス 胸水細胞診の1例、第63回日本臨床細胞学会秋期大会、2024年11月17日。千葉。
- 5) 野村基子、甘利ひかり、田原浩樹、齊藤健也、前田悠希、椎原淳、長井良昭、太田洋充、大城久、山口泰弘：当院における細胞診検体を用いた肺癌多遺伝子変異検索システムMINtSによる解析結果、第47回日本呼吸器内視鏡学会、2024年6月27-28日。大阪。
- 6) 福井伶奈、梅本尚可、磯永佳祐、野口義久、岡部直太、大城久、前川武雄：爪下外骨腫を疑ったSuperficial Acral Fibromyxoma (SAF) の1例、第123回日本皮膚外科学会総会、2024年6月6-9日。京都。
- 7) 大瀧薫、梅本尚可、前川武雄、出光俊郎、大城久：爪甲色素線条を呈した爪下单発性被角血管腫の1例、第123回日本皮膚外科学会総会、2024年6月6-9日。京都。
- 8) 松坂美貴、勝又文徳、大瀧薫、梅本尚可、平山貴浩、秋山達、大城久、前川武雄：若年女性の下肢に生じた偽性筋原性血管内皮腫の1例、第123回日本皮膚外科学会総会、2024年6月6-9日。京都。
- 9) 新井優希、梅本尚可、根津寿雄、山本直人、大城久、前川武雄：爪下無色素性悪性黒色腫の1例、第76回日本皮膚科学会西部支部学術集会、2024年9月7-8日。徳島。
- 10) 守川春花、蛭田昌宏、岡部直太、安藤史織、井上亨悦、渡部文昭、力山敏樹、田中亨、安達章子、大城久：肝臓に発生したgranulocyte-colony stimulating factor (G-CSF) 産生性炎症性筋線維芽細胞腫瘍の1例、第113回日本病理学会総会、2024年3月28-30日。名古屋。
- 11) 福井伶奈、梅本尚可、水野謙太、酒井利育、岡部直太、大城久、出光俊郎：激しい疼痛を伴ったMicrosporum canisによるケルスス禿瘡の2例、第123回日本皮膚外科学会総会、2024年6月6-9日。京都。
- 12) 柚夏美、大川敦也、木下裕貴、伊古田雅史、山田健嗣、内山拓、吉野義一、大城久、草鹿元：ロゼット様配列を伴った小脳腫瘍の1例、第42回日本脳腫瘍病理学会学術集会、2024年5月24-25日。広島。
- 13) 大城久：教育講演：漿膜の構造と機能、病理一体腔液細胞診の理解のために一、埼玉県臨床細胞学会「2023年度埼玉県医師会精度管理事業報告会」、2024年7月6日。埼玉。

【その他の発表】

- 1) 河野哲也：2023年度細胞検査士会鏡検実習研修会（実践コース）『呼吸器・泌尿器・胆膵領域における細胞像と鑑別ポイント』、カテーテル採取の細胞像の見方・考え方、講義・鏡検実習、2024年1月20日（土）～21日（日）、日本臨床細胞学会細胞検査士会学術委員会、大阪医科薬科大学
- 2) 小島朋子：腺癌と誤認した気管支擦過扁平上皮癌の1例、第41回埼玉県細胞検査士会 学術集会 検討症例会、2024年5月12日（さいたま）
- 3) 河野哲也：「細胞診/ベテラン編 重層コンパウンド法によるセルブロックの作製方法」、標本道場、2024年6月、サクラファインテックジャパン 学術情報HP
- 4) 河野哲也：「泌尿器実習」、第133回細胞検査士養成講習会、2024年7月23日（火）、杏林大学保健学部実習室（井の頭キャンパス）
- 5) 河野哲也：判定に苦慮した甲状腺乳頭癌の1例、第52回 埼玉県細胞検査士会 鏡検セミナー、2024年10月5日（さいたま）

6. 部門の事業計画

- 1) 目標に対する達成度：2024年度の目標としては「自分の手技に満足していますか？」を掲げ、概ね達成できたが、「マニュアルに準じた手法に要因があり、手技の理解度が浅い、良いものを知らない、

徐々に自己流になる。」との指摘があった。

- 2) 2025年度は「技術力の継続」を目標に掲げ、安全で正確、かつ質の高い業務の遂行を目指して行く予定である。
- 3) 増大する病理診断業務に対応すべく、病理医（病理専門医）の増員を当センター執行部に要望する。
- 4) 病院機能評価の審査結果を踏まえ、剖検室の作業環境の改善および感染対策に向けた改修工事等を当センター執行部に要望する。